
K&S

ごまだれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K&a m p・s

【Nコード】

N 4 4 5 2 Q

【作者名】

ごまだれ

【あらすじ】

上野慧は大学生で、遠崎鈴は引きこもりのオタク趣味。ずっと一緒だったそんな二人が、同居を始めました。この二人の周りでのどろという事はない日常を四コマもどきでどうぞ。この作品は特別な事でもない限り、会話文のみで形成されています。それでもいい方はどうぞ。

黒羽のメモ帳（前書き）

人物紹介など。今後加筆します。

黒羽のメモ帳

人物

上野 かみの 慧 けい

文木大学2年生。19歳。8月1日産まれ。異文化研究会所属。副部長。私の先輩。

花月荘202号室在住。遠野鈴と同居

遠崎鈴とは幼馴染で、実家が隣同士で。中高一貫だったとはいえ、幼稚園の頃から大学までと文字通りのずっと一緒。凄い。

遠崎鈴のオタク趣味の理解者で、引き籠ってからは甲斐甲斐しく世話をしていた。

備考：遠崎鈴との関係は、先輩にとって、まんざらでもないらしい。

遠崎 とあさき 鈴 すず

大学1年生（一応、まだ退学届は出してはいないけど、出席日数は足りないから）。19歳。10月5日産まれ。一応先輩だけど同級生。

花月荘元203号室の住人。現在は先輩と同じ202号室。

先輩とは幼馴染。詳しくは先輩の欄参照。

オタク趣味は中学の時から。原因は不明。要調査。

同人誌を描いており、壁サーとの事。ペンネームは須野和美。

備考：不健康な生活の割に、身長と体重。挙句にスリーサイズまでパーフェクト。理不尽。

新谷 黒羽しんたに くろは

私自身。大学1年生。18歳。3月4日産まれ。異文化研究会所属。部長にして創設者。

花月荘201号室の住人。

先輩とは中学時代からの付き合い。幼馴染ではない。

初めて会ったのは中学の時に、研究会を創設した時の勧誘の時。以降、研究会の副部長兼会計兼庶務。早い話がただの雑用なんだけど、それでも部活に居続けた稀有な人。M？

備考：何でかは知らないけど、先輩と一緒に居るとドキドキする。何故？

田中さんたなか

大学3年生。23歳。一浪。5月5日産まれ。下の名前は知らない。サークルの所属は無し。

花月荘204号室の住人。

若干オタクらしい。遠崎鈴のファン。

花月荘の大家さんの孫に片思い中。

備考：眼鏡

加筆予定。

場所

文木大学あやみ

私と先輩と田中さんが通っている大学。文系。
可もなく不可もない中堅大学。花月荘からは徒歩と電車で1時間。

備考：特になし

かけつそう
花月荘

私と先輩と遠崎鈴と田中さんが住んでるアパート。

築50年。数年前にリフォームしたらしい。2階は家賃月5万。1階は家賃月4万5千。立地条件としては微妙で、駅まで歩いて30分。コンビニとかスーパーは近い。

2階建。1階と2階にそれぞれ4部屋ずつ、計8部屋。敷地内に大家さんが住む家がある。

備考：壁が薄い。

第01話

朝

慧「朝か……」

鈴「……」

慧「……」

バフツ

鈴「痛っ!? 何!? 襲撃!? おのれ、エクソシスト!!! 私
は意地でも働かないぞ!!!」

慧「訳分からねえ事言ってねえで、さっさと起きろ!!!」

遠崎 鈴

鈴「まだ鼻が痛いよ……」

慧「知るかよ。てか、何で此処に居るんだ。お前の部屋は隣だろう。
ちゃんと鍵も掛けた筈だ」

鈴「うん。かかってたよ? でも、この部屋、居心地良くてさ。電
気止められてないから、エアコン使えるし。物が少ない分、居住ス
ペース広いしね。だから」

慧「だから？」

鈴「合鍵作っちゃいました」

慧「合鍵置いて、帰れ」

遠崎 鈴2

鈴「待って、待って！ 他にもそれはそれは深い理由があるんだよ！」

慧「一応聞いてやる」

鈴「私、一応慧と同じ大学の生徒だけど引き籠りでしょう？」

慧「そうだな」

鈴「だからね」

慧「ああ」

鈴「仕送り無くなって、家賃払えなくて、部屋を昨日付で追い出されたの」

慧「実家に帰れ！！」

遠崎 鈴3

鈴「家に帰っても、追い返されるだけだよ！ お願いだから此処に置いて!？」

慧「面倒見切れるか!! 何回も言ったたる!? このままだと大変な事になるって!!」

鈴「幼馴染だし、其処を何とか!!」

慧「断る!!」

鈴「何でもするから!!」

慧「炊事洗濯掃除は当たり前で、夜は（ピー）とか（ピー）とか（ピー）とかするってのか」

鈴「えっと……け、慧が望むなら／／」

慧「言った俺が悪かったよ」

荷物

慧「そう言えば、鈴。部屋を追い出されたって言ったけど、荷物はどうしたんだ？ あの、大量の漫画やらゲームやら」

鈴「部屋を追い出すという大家さんからの警告があった日から毎日

パソコンにインストールしたり、画像データにして保存をするという行動を開始したの」

慧「先ず警告があつた時点で大人しく学校に行くの行動をすべきだと思つのだが」

鈴「順調にデータ化していつて、本体と外部メモリーがいつぱいになったら、データ化したゲームとか漫画を泣く泣く売ってお金にして、それでメモリーを購入。データ化したのを保存してを繰り返して」

慧「無視かよ」

鈴「でも、順調に進んでたからかな。慧の部屋、スペースあるし、幾らか持つても大丈夫じゃないかなと思ひ始めたら、ゲームの本体を持つておきたいとか、この漫画は手元に置いておきたいと思ひ始めるようになって」

慧「その時点で俺の世話になるつもりだったのがいただけねえ」

鈴「追い出された部屋に置いておく訳にもいかず、それらのゲームやら本はこの部屋の前の廊下に積まれています」

慧「ちょうど今、鈴の部屋の隣に住んでいる田中さんが階段に行けずに困ってるから、とりあえずさっさとこの部屋に持ってこい」

* 田中さん *

鈴「よいしょっと」

慧「すいません、田中さん。ご迷惑をおかけして」

田中「いやいや。それにしてもすごい量だね」

鈴「いやあ、気がついたらこんな事になってまして」

慧「褒められてねえから、照れるな」

田中「ハハハ。しかしあれだけ売れていれば、それなりの貯蓄になると思うけど、そんな事もないのかい？」

慧「……ん？」

田中さん2

鈴「え？ ア、アハハ。色々ありますので……。それより！ その話は駄目です！」

田中「そうだったのかい？ てつきり知ってる物だと」

鈴「後で話そう、後で話そうと思ってるうちに気がついたら」

慧「良くは知らんが、とりあえずゆっくり話そうか。幸いまだ時間もある」

鈴「ちよっと待って!?! 襟首持ってそんな猫みたいに運ばないで

って違う！ 助けて、田中さん！！」

田中「ああ。もう行かないと電車が。それじゃあ、二人とも」

慧「はい。行ってらっしゃい、田中さん」

鈴「ええ！？ ちょっと田中さん！！ カムバック！！ カーム、
バック！！！！」

秘密

慧「あゝ」

鈴「うう」

慧「一日中、部屋に閉じこもって漫画やらゲームやらネットやらを
やっていた事は知ってるが……」

鈴「昔からちよくちよく書いてたけど、一年前くらいからはこれば
っかりかな。24時間中12時間以上はこれだったと言っても過言
じゃないよ！」

慧「俺、お前のこれをやってる姿、見た事無いぞ」

鈴「それは、慧が家に来てご飯作ったりとかしてる時は、しないよ
うにしてたから……。気味悪がられたりされたら嫌だし」

慧「……はあ。これくらいで気味悪がったりしたら鈴の部屋になん

て入れる訳ないだろうが。寧ろ秘密にされていた事の方が若干シヨツクだ」

鈴「同人誌書いてました!!」

慧「もう知ってる」

同人誌

慧「それにしても、随分と書いたんだな」

鈴「暇だったからね」

慧「田中さんがどうして知ってたのかは置いておいて、結構売れたみたいな話をしていたが」

鈴「壁サーだからね！ それに、商業誌の方でも、何度か書いた事あるよ！」

慧「すげえのは分かったが……。ならなんで貯蓄が無い」

鈴「……」

慧「……」

鈴「お、女の子は色々入り用なんだよ!!」

慧「化粧しないし、殆ど着たきりのお前がほざくな!!」

ペンネーム

慧「所で、須野和美って誰？」

鈴「私だよ？ ペンネームってやつ」

慧「あー、なるほど。……須野和美、すのかずみ……。もうちよつとで何か出てきそうなんだが」

鈴「！？ ストップ！！ ストップだよ慧！！」

慧「なんだよ、急に」

鈴「えつと、お腹！ お腹すいたから、朝ご飯が食べたいかな！！」

慧「？ まあ、いいけど。つと、時間もやばいし今日は手抜きだな。トーストと簡単なサラダと目玉焼きでいいか。手伝えよ」

鈴「うん！」

朝食

慧「何でターンオーバーなんだ？半熟なのはいいけど」

鈴「目玉焼きと言ったら、ターンオーバーでしょ。トーストに乗せ

やすいし。それより、サラダにトマト入れないでよ」

慧「送られて来たからトマトが大量にあるんだ。消費手伝ってくれ」

鈴「じゃあターンオーバーでも文句言わないでよ。ずっとこればかり作ってたから、ひっくり返すのと火の通り加減は絶妙でしょ？」

慧「……まあ、確かにな」

鈴「えへへ」

慧「でもトーストが焦げてるのはなあ」

鈴「ごめんなさい」

結局

慧「んじゃ、学校行くわ。洗い物は頼む。昼は適当に、ある物食ってくれ。後、鞆取ってくれ」

鈴「はい」

慧「サンキョ。じゃあ、行くな」

鈴「慧」

慧「何？」

鈴「えっと。結局私は此処に居ていいの？」

慧「炊事洗濯と掃除と、色々手伝えよ」

鈴「(ピー)(とか)(ピー)(とか)(ピー)は？」

慧「やっぱり帰れ」

第02話

* 新谷 しんたに 黒羽 くろは *

慧 けい 「ん？ おお、黒羽。おはよ」

黒 「おはようございます、先輩。今から学校ですか？」

慧 「ああ。まあな。黒羽もだろ？」

黒 「そうですが。私は授業ではなく、図書館に用があるので、早く出ただけです」

慧 「そっか」

黒 「……疲れてます？」

慧 「まあ、朝から色々あってな」

黒 「……いくら疲れてても、活動はいつも通りです」

慧 「……そっかあ」

* 電車 *

慧 「流石にこの時間は混むな……。もっと早い電車にすればよかった」

黒「確かに。もっと遅い電車にすればよかったです」

慧「はあ、授業が授業だし、辟易するなっ」と

黒「？ 私に覆いかぶさる様にしてどうしたんですか？ 痴漢？ 私、遠崎さんほどスタイル良くないですよ？」

慧「痴漢じゃなくて、純粹に壁になろうと思ったただけだぞ。前に痴漢されたって言ってただろ」

黒「……今なら痴漢し放題ですね」

慧「駅員に突き出すぞ」

プライバシー

慧「はあ、朝から疲れる事、ばっかりだ」

黒「その主だった原因は私じゃなくて遠崎さんです」

慧「あながち否定は出来な……。まで。何故知ってる？」

黒「因みに」

慧「聞けよ」

黒「彼女が家に来たのは4時15分37秒です」

黒「壁が薄いせいですね」

慧「九割九分九厘、黒羽のせいだからな!？」

黒「先輩がそんな物を見ているのが悪いんですよ。まあ、健全な男性ならしょうがないのかもしれないかもしれませんが」

慧「本当に何で知ってるんだよ!？」

黒「ですから壁が」

慧「パッケージを含めて誰にも見られないように最善の注意を払った拳句、絶対に音ばれしないようにヘッドホンまで使ったんですけど!？」

メイド

慧「くそ……。もう二度と見ねえ」

黒「時に先輩。そんなにメイドが好きなんですか？」

慧「頼むから俺の傷をこれ以上抉らないでくれ」

黒「では、私がメイド服を着て先輩にご奉仕したら先輩はどうなっていますか？」

慧「どうもなりはしない」

黒「……………」

慧「黒羽は黒い三角帽子にマント羽織ってた方が似合うぞ？」

黒「……………突然変な事を言わないで下さい」

慧「ん？ ああ、すまん」

密集

駅、 駅。お降りのお客様は

慧「後一駅か」

黒「暑い……………」

慧「この時間帯はしょうがないだろ」

黒「先輩……………」ギョッ

慧「どうかしたのか？」

黒「えっと……………。あった。相変わらず午前ティーですか」

慧「ほっとけ」

黒「頂きます、先輩」

慧「車内は飲食禁止です」

水分

慧「やっと着いた。まだ歩くけど」

黒「暑かったです」

慧「はあ、俺の午前ティー、返してくれ」

黒「どうぞ」

慧「ああって、半分どころか三分の二も入ってねえ!？」

黒「ごちそうさまでした」

慧「あの短時間でこれだけ飲んだのか!? 俺の水分、どうしてくれる!？」

黒「将来的に私の」

慧「言わせるかよ!! そして、今すぐ喉の渇きを潤したいんだけど!？」

類友

慧「はあ、つたく。何で俺の周りには黒羽みたいなのが集まるんだ」

黒「つまり、先輩の周りには常識人が集まってるって事ですか？」

慧「少なくとも家賃払えなくて部屋追い出されて、迷わず幼馴染の家に大量の私物と共に上がり込む奴や、ストーキング一歩手前の、異文化研とは名ばかりのオカルト研の部長レベルの常識人が揃ってるな」

黒「前者はともかく、後者は一般人じゃないですか」

慧「俺と黒羽の一般人の定義のズレから直す必要があるそうだな」

黒「まあ、それでも。自分の周りには常識人とはかけ離れた人達が集まってると思うなら、貴方にこんな言葉を送りましょう。『類は友を呼ぶ』」

慧「言われると思ったよ、この女郎!!」

学校

慧「到着っ」と

黒「相変わらず可もなく不可も無い外見ですね」

慧「大学ってそんなもんだろ？」

黒「校門から見て左右対称のような校舎」

慧「ああ」

黒「そして校門に囲まれるようにしてある噴水がある広場はそれなりの生徒の憩いの場で……」

慧「ああ……」

黒「その噴水の中で禪一丁で乾布摩擦をする、暑苦しい男が一人」

慧「あんなのと同類になりたくない」

第03話

* 松宮 まつみや 俊樹 としき *

俊「ん？ お！ 上野 かみの に新谷 しんたに か！」

黒 くろ「話しかけないで下さい」

俊「其処まで言わなくても！？」

慧 けい「何やってるんだ？ 昨日までそんな事やって無かったよな？」

俊「乾布摩擦が体にいいって話を聞いてな。実践してみた」

黒「そうなんですか？」

慧「うん。まあ。因みに、どれくらいやってるんだ？」

俊「既に一時間はやった！」

慧「……」

* 乾布摩擦 *

慧「乾布摩擦の効果は三つ」

慧「皮膚をこすることで皮膚に刺激が加わり、皮温調節機能が高ま

ることによって皮膚の血のめぐりがよくなること」

慧「古い皮脂が取り除かれて新しい皮脂が分泌されることにより、
体脂肪が減少したり、皮膚にうるおいがでる効果も期待できるらし
い」

慧「そして、全身を冷たい空気にさらすことで、自律神経の働きが
高まること、の三つだ」

慧「つまり、皮膚を外部の刺激に晒し続けることで、全身の体温調
節を高める効果があると思われる」

俊「おお！」

慧「ただし、毎日やっていたら話。そして」

黒「そして？」

慧「やり過ぎは体に毒だ。5分、10分。毎日繰り返す事が体にい
い」

俊「つまり……」

慧「さつさと服着ろ、このド阿呆」

関係

俊「そうだったのか……」

慧「調べないでやったのかよ」

黒「馬鹿ですか？」

俊「俺には大分厳しいな!？」

慧「いいぞ、もっとやれ」

俊「酷くないか!？」

慧・黒「……はあ」

俊「酷いよな!？」

* 吉河よしかわ 優奈ゆいな*

優「おーす、三人とも」

慧「ん？ おお、おはよう、ユウ」

黒「おはようございます、ユウ先輩」

俊「はよっす」

優「三人とも今から授業なの？」

慧「俺と俊はそうだな。黒羽は図書館に用事があるらしい」

優「……ふうん」

黒「なんですか？」

優「別に？ 確か黒羽ちゃんが取ってる授業が午後からだった筈だから、随分と図書館に居るつもりなんだなあと思ってさ」

黒「!？」

黒VS優

黒「別にユウ先輩には関係ないじゃないですか」

優「まあ、そうなんだけどね。何でかなって」

黒「それより、何で貴女が私の取ってる授業を知ってるんですか」

優「私それなりに友達多いからねえ。黒羽ちゃんが取ってる授業と同じ物とってる子の友達だっているし、教員とそれなりに仲もいいから、それくらいは簡単に分かるよ？ それよりも、どうして？ どうして？」

黒「関係無いじゃないですか」

優「言えないような理由なの？」

黒「気まぐれです」

優「ふうん」

黒「ニヤニヤしないで下さい」

男達

俊「相変わらず、あの二人の仲は微妙だな」

慧「黒羽がそれなりにちゃんと対応してるから、別に嫌いって訳でも無いんだろうけど」

俊「つまり俺も嫌われてはいないって訳だな!？」

慧「……………さあ？」

俊「そんだけ間が開いてその反応!？」

慧「はあ。まあ、あれだ」

俊「？」

慧「いい加減服着ろ」

黒VS優2

優「別にニヤニヤなんてしてないよ？」

黒「そうですか。そんな残念な顔が地顔ですか」

優「お、言ってくれるねえ。一応、私先輩だよ？」

黒「ですからなんでしょう？」

優「聞き耳立てて、慧君の家に幼馴染の女の子が上がり込んで来て、しかもそのまま同債に発展しそうだから、慌てて先手を打とうと態々苦手の満員電車も我慢して、一緒に登校してきた後輩ちゃんも、一応私に敬意を表するべきじゃないかな？」

黒「……一つ違いの癖に随分な態度ですね？」

優「動揺してるねえ。毒舌に切れが無いよ？」

勝者の権利

優「えい」ギョッ

慧「お？ 終わったのか」

優「私の勝利だよ？」

黒「何勝手に決着付けてるんですか！！ てか、離れる！！」

優「だっかつら」。何でこの時間に学校に来たのかって質問に答え

ればそつちの勝ちでいいよ？　すぐに離れてあげる」

黒「貴方のその問いに答えなきゃいけない理由がまったくないです
！！」

優「なら私の勝ちだよね？」

黒「勝敗を決める条件を提示していない時点で、此処に勝ち負けは
無いです！！」

優「毒舌で冷静な黒羽ちゃんが台無しだ」

黒「いつもの事ですけど、貴女と話していると殴りたくなります。そ
のままくっついてると本気で殴りますよ？」

いつもの事

慧「ほら。お前ら落ち着け」

黒「私は落ち着いています」

慧「冗談にしては笑えないぞ、黒羽」

黒「至って大真面目です」

慧「あっはっは。それよりもユウ。腕がメリメリって痛い痛い痛
い！！！！」

黒「何やってるんですか？　もしかして動揺してたり」

優「する訳無いでしょ？　あんまり変な事言っていると、黒羽ちゃん
の慧に言えない秘密を一から十まで、全部ばらしちゃうよ？」

黒「そんな事を言っている時点で、大分動揺してますよね？」

優「面白い冗談だねえ」

慧「……助けてくれ俊」

俊「いつもの事だ。諦めろ」

一方その頃

鈴「〜」

ガシヤン

鈴「……〜」

ガシヤン

鈴「………〜」

ガシヤン

鈴「あ〜、ずっと、慧に頼りっぱなしだったからなあ、家事全般」

ガシヤン

鈴「よし、止めよう。昔の迷惑にかからないように」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4452q/>

K&S

2011年10月7日14時28分発行